



「授業づくり」

師走を迎え、慌ただしくお過ごしのことと思います。12月は、一年の締めくくりの時期であるとともに、新しい年を迎える準備の時期でもあるかと思えます。先生方におかれましては、健康第一でよい年が迎えられるよう願っております。

さて、自分の授業をよくしたいと思わない教師はいません。しかし、具体的にどこをどうすればよくなるのかわからないまま時間が過ぎてしまうことがあるようです。

具体的な助言は、先生方の授業を変えるきっかけとはなりますが、よりよい授業にしていくためには、継続的な助言が必要となります。しかし、多くの先生方にとっては、継続的に外部からの助言を受けることは現実的ではありません。

自分自身で、どのように改善すればよいか、どんなことを意識すればよいか、授業改善には何が大切なのかを気づかなければなりません。

1, 自分の授業のことを覚えていない

授業の助言をする時に感じるがあります。それは、自分の授業を覚えていないということです。授業の振り返りで、子どもの発言や反応、教師の対応について取り上げた時に、どんな発言だったか、時にはその場面自体を覚えていないことがあります。先生が覚えていない場面に重要な問題が潜んでいることがよくあります。

例えば、授業の中で、「何でもいいから気づいたことを言ってください」と教科書や資料をもとに発表させる場面です。子どもの発言が期待したものでなかった時に、「他には?」「他には?」と次々に指名していくことがよくあります。期待した言葉が出てくると、「いいことに気づいたね」とほめて、「今、〇〇さんが気づいてくれたけど…」と説明を始めます。自分の後に「いいことに気づいたね」とほめてもらえる子どもがいるということは、自分の発言は教師の期待したものでなかったということになります。教師は「間違い」と否定していないつもりでも、子どもには否定されたと感じられるのです。こういうことが続くと、教師が「何でもいいから」と言っても、教師の期待している答えがあるはずだからと、子どもは発言に慎重になっていきます。挙手が少なくなってきたことには気づけても、子どもの表情を見ていないので、その「原因」に気づくことはできません。一人で授業を振り返ってもなかなか授業改善に結びつかない理由です。

2, 授業中の子どもの姿を意識する

ベテラン教師が若手教師に授業の助言をする際は、まず、実際の授業で起こっていること、子どもの姿を授業者と共有します。そのためには、自分の授業のその場面を授業者が意識して覚えてくれていることがとても大切です。そのために私は、できるだけその若手教師と一緒に他の先生の授業を見る時間を取るようにします。

教室の前方の廊下から入口の窓越しに子どもたちの姿だけを見るのです。

そして、「発言が終わった後の子どもの表情を見てください」「挙手していない子は何をしていますか」「教師の発問の後、子どもはどのような反応をしていましたか」と見てほしいところを指し示します。すると、若手教師は、普段自分が気づいていない子どもの姿に驚きます。

こういう経験をする中で、自分の授業が見えるようになってきます。

3, 目指す子どもの姿の明確化

授業で目指す子どもの姿が明確であれば、その姿と実際の子どもとのずれが問題として見えてきます。そのことに気づくことができれば、どのようにすればよいか、改善策も見えてきます。しかし、この目指す子どもの姿が具体的になければ、目の前の子どもに問題や原因、改善のヒントがあってもそれに気づくことができません。「どこを見るか」という視点を意識する必要があります。

4, 子どもとの信頼関係を築かなければ教材研究をしてもダメ

授業を見ても、その授業の指導内容や発問といったいわゆる教材研究に関する助言を全くしないことがあります。理解しやすいようにと説明を工夫しても、肝心の子どもが集中して聞いていなければ、説明の内容を評価することはできません。発問を工夫しても、子どもが自分の考えを発言してくれなければ、発問が適切だったかは評価できません。名人の授業と全く同じ課題で授業をしても、子どもが同じように反応するわけではありません。授業を成立させる前提となる、授業規律や安心して発言できる雰囲気や学級になれば、どれだけ教材研究をしてもそれを活かすことはできません。

教師が「口を閉じて」「顔を上げて」「先生を見て」と指示しなければ、教師が見ていなければ、授業規律が成り立たないようでは困ります。教師の話を知りたいと子どもが思う必要があります。そのためには、教師と子どもとの信頼関係が大切になります。

信頼関係は、相手を否定しては築けません。子どもたちは注意ばかりされると自分を否定されている気持ちになります。教師が意図的に子どもを認める場面が必要です。顔を上げていない子どもを注意するのではなく、顔を上げている子どもをほめるのです。

できないことを注意して減らそうとするのではなく、できたことをほめてよい行動を増やそうとする発想です。子どもたちが認められる場面が増えていくことで、教師との信頼関係が築かれていきます。先生の話を知りたいと思うようになっていきます。

発言に関しても同様です。子どもが安心して自分の考えを発言するためには、自分の考えが否定されない保障が必要です。

正解が出ても「同じように考えた人いますか?」と同じ考えを発表させる機会を与えるようにします。

間違いでも「なるほど、〇〇さんはそう考えたんだね」と発言を受容することが大切です。何人かの意見を聞いた後、間違えた子どもに「あなたと違う意見があるけれど、どう?」と聞き返して、本人に間違いを修正する機会を与えれば、最後は必ず正解で終われます。「友だちの意見を聞いて、考えを変えることができるのは素晴らしいね」とほめるようにすれば、発言しても否定されない、必ず最後はほめてもらえるという安心感が学級に生まれます。どんな答えでも受容することで、子どもとの信頼関係が構築されていきます。教材研究を活かすためにも、子どもとの信頼関係を築くことを第一にしてほしいと思います。

5, 授業は、一問一答ではない

学校での学びは、教科の基礎基本をしっかり押さえる他に、集団で学んでいることの価値を生かすことが大切になります。また、古くから「教科を学ぶ」のではなく、「教科で学ぶ」とも言われています。国語や算数・数学、社会などの一問一答ではなく、それを介して生涯必要な力を学ばせるのが、学校での授業の役割です。

例えば、算数・数学などで「これって、別に大人になって使わないよね」という声はあります。確かにその一問一答は使わないかもしれませんが、その問題を解くために使った感覚、論理的思考力などは、大人の時でも使われています。

若い教師の場合、「目の前の学習ができるようになることが指導の全てです」というのは仕方がないかもしれませんが、もちろん、それも重要なことです。むしろ低学年などは「考えればどんな問題でもできそう」と思えるように指導していくと、基礎基本の習熟や意識の面でも、後々の学習につながっていきます。

これからの多様な教育の選択肢がある時代には、「集団で学べること」「生涯にわたって必要な感覚を学ぶこと」を目的にすると、明日からの教材研究の視点も変わっていくのではないのでしょうか。

研修

12月 教育研究所事業

2日 (木)	初任者研修⑫	オンデマンド
8日 (水)	中堅教諭等資質向上研修⑫	オンデマンド
9日 (木)	初任研指導教員連絡協議会④	紙面開催



新刊のお知らせ

書名	著者
『学校の未来はここから始まる』	木村 泰子
『学習指導要領の読み方・活かし方』	合田 哲雄
『気になる子どもの心に寄り添う 教師のための心理術』	浦野 裕治